高齢者福祉施設でのターミナルケアにおける spiritual pain の軽減に関する研究

○　東京家政学院大学　　氏名　朝倉　和子（6215）

西口　守（東京家政学院大学・3468）

〔キーワード〕高齢者福祉施設、スピリチュアルペイン、ケア

１．研 究 目 的

介護保険制度が 10 年経過し、政策的誘導もあり高齢者福祉施設、特に特別養護老人ホームにおいては、利用者の重度化が見られ、ターミナルケアも急速に展開するようになった。このような状況においては、言葉により意思の疎通が図れない利用者の気持ちは理解されにくく、職員が、対話困難な利用者といかに関係を作るかという課題が形成しつつある。このした中で、高齢者施設ではスピリチュアルケア 、ヒーリングセラピー（癒しのセラピー）という新しいコミュニケーションの方法に現在強い関心を抱き始めている。この様な対話困難な高齢者に対する新しい方法は、どの様な背景や力動で現場において積極的に受け入れられるのかを明らかにすることが本研究の目的である。

２．研究の視点および方法

高齢者施設現場において、スピリチュアルケアがどの様に捉えられ、利用者が抱く精神的な痛みを施設職員がどの様に認識し、向き合っているのかを把握するため、アンケートによる量的調査と施設職員へのグループインタビューによる質的調査を行った。

アンケート調査の概要：調査期間、2011（平成 23）年 7 月 22 日～8 月 12 日。東京都及び神奈川県内の特別養護老人ホーム 615 施設への郵便調査。回答は生活相談員に依頼した。回収数は 176、回収率は 28.6%。調査項目は所属施設でのスピリチュアルペイン軽減のケア、そのためのチームの有無、利用者が抱くスピリチュアルペインとは何かを中心に聞いた。

インタビュー調査の概要：平成 24 年 2 月 11 日、都内特別養護老人ホーム職員 8 名（所属施設はすべて異なる）におけるグループインタビュー。時間は約 140 分程度。インタビューガイドを用いた半構造化インタビューを実施した。インタビューガイドは①死とその過程の哲学的、実際的な問題や課題に向き合う姿、②認知症の人々のスピリチュアリティの理解、③スピリチュアルペインへの具体的な軽減のための支援、④スピリチュアルペインといわゆるヒーリングセラピーの関係、の 4 つの項目を設定し、利用者の死への感じ方、認知症や対話困難の利用者が抱いているであろう不安への対応方法、スピリチュアルペインとヒーリングセラピーの関係性、さらに職員が感じている問題等を中心に聞いた。インタビューの結果は、逐語化し、質的コーディング法で分析を行った。

３．倫理的配慮

アンケート調査、インタビュー双方において研究の目的や意義について文書や口頭にて説明し､調査協力による不利益を被らないこと､個人や施設が特定できないよう留意した。グループインタビューでは記録やその権利等について承諾書を交した。

４．研 究 結 果

アンケート調査では、ターミナルケアの実施施設は 7 割を超えたが、スピリチュアルペイン軽減のケアの実施は 4 割にまで下がり、スピリチュアルペイン軽減のケアはまだ一般的ではないことが伺えた。さらに施設職員から見た利用者のスピリチュアルペインの具体的内容を尋ねたところ、①“生きながらえることが辛い”に 85.8%、②“自分らしさが失われている”に 84.5%、③“家族や大切な人と別れることが辛い”に 89.7%が肯定した。さらに、施設におけるペイン軽減のための取り組みとしては、①身体的な苦痛を最小限にする取組の実施が 95.1%、②利用者の希望を聞いたり、そばに寄り添ったりするがいずれも 90%以上であった。しかし、死生観を話し合う、墓参りをする、仏壇や仏具などの宗教的な道具を用意する、線香をあげる手伝いをするなどのスピリチュアルペイン軽減のための独自の支援に関しては 50%以下の答えが多かった。

グループインタビューの結果は、①利用者と死への過程、②職員の死への向き合い方、③スピリチュアリティの理解と“宗教的なるもの”への距離感、④新しいコミュニケーションとしてのターミナルにおけるタクティールケアなどのカテゴリが抽出されている。特に、利用者は環境の変化や家族等との別れ（死別も含む）に寂しさを感じており、それが精神的な痛みや混乱につながっているとの意見があった。さらに、利用者の死を体験した後の職員への振り返りの大切さや介護というケアの意義の再考の必要性も挙げられた。

5. 考 察

アンケート、インタビューに共通して明らかになったことは、相談員はスピリチュアルケアの認識は少ないものの、実際にはそれを実践しているように思われた。この中においては利用者に寄り添い、安心感を持ってもらうような支援（寄り添う）が重要であると認識している。ターミナルケアにおける利用者の様々なペインを相談員も認識しているが、その支援は垂直的な関係に基づくいのち、いわゆる魂への配慮、に基づく独自の領域を中心としたものではなく通常のコミュニケーションケアの延長ではある。しかし、このかかわりこそが、スピリチュアルペイン軽減の支援の中核であるとも言える。さらにインタビューでは、利用者や家族は終末期を受容しつつも戸惑うというパラドックスに直面し、また相談員もそれに向き合う葛藤を読み取るができた。相談員自身の死生観を養うことが必要であるとの意見もインタビュー時に挙げられたが、これは、ターミナル期という“濃縮された命”を生きる中にいる彼らから我々が学ぶことの大切さを指していると考えられる。